



インドネシア共和国「バリの森を考える会」の活動について

光森史孝*¹・高樋さち子*²

背景

インドネシア共和国バリ州は、「芸術・芸能の島」「神々の島」として、世界に誇る観光地である。島に足を踏み入れると、椰子の木、多彩な果物、花々を咲かせる木々など、自然に囲まれた景観に、心が癒やされる。しかし、世界の例に漏れず、この地域にも、自然環境の破壊が忍び寄っている（森林被覆率は、バリ島の総面積の22%強）。火山噴火による溶岩流跡地の放置、乾燥による山火事、畑地などへの無断転用、建材使用のための無断伐採で、森が消失している。その環境破壊の影響を被っているのが島で最大の火山湖・バトゥール湖（Batur Lake）である。ここ数年で、急激に湖水位が2mも低下している。この湖は、住民の飲料水、豊かな棚田を潤す農業用水となり、島の人たちの“命の水・みずがめ”となっている。

この異変に気づいた湖近くの高校生たちが、自発的に植林に取り組んでいる姿に出会った。2006年、バリ島在住の数名の日本人たちが「この島で生活をしているので、植林活動に協力をしたい」と思い立ち「バリの森を考える会」の設立に至った。

「バリの森を考える会」植林活動—雨季—

「バリの森を考える会（以下バリ森会）」の活動目的は、地元バリの人、在住日本人・外国人、加えてバリを観光で来訪する人たち含めて一緒に、バリの森のことを考える機会を広げることである。

雨季の毎年10月から翌年3月は植林活動、残りの乾季は、森を守り育てるための知識の蓄積、広報活動というサイクルで進めている。「バリ森会」の植林活動の一つ、毎年12月初旬開催の「植林祭」は、日本のNPO「アジア植林友好協会（Asian Green Forest Network）」や「バリ森林保全協会（Yayasan

Bali Hijau Lestari）」と協働して、参加者最多の催しとなる。2009年、第1回開催から、毎回約500人が3,000本ほどの苗木をキンタマーニ高原のバトゥール山麓の草原化した荒廃地で植林を進めている。また、この火山性土壌で植物の生育が困難な地域でもあり、理想値森林被覆率30%以上にする水源涵養林造成事業の一環としてとして植林を進めている。在来樹種の5種、アンププ（フトモモ科 *Eucalyptus* sp.）、センダン（センダン科 *Melia azedarach*）、アメリカムネノキ（マメ科 *Samanea saman*）、ベンジャミンゴム（クワ科 *Ficus benjamina*）、メリナ（クマツヅラ科 *Gmelina arborea*）を選定し植林をすすめている。

地元高校生達との協働は、当初国立キンタマーニ第1高校の生徒、先生たち（写真1）が主体だったが、高校生の植林グループ「GITAKITA」（写真2）が誕生、その後所属県は違うが、国立ギヤナール第1高校など合計6校が、この植林活動に参画している。

また、島内のボーイ・ガールスカウトや村の呼びかけに応じて「バリ森会」として参加し、一方では「バリ森会」独自で湖畔の辺境地域で近隣の村の人に協力を呼びかけ、コミュニティーを拡大しながら植林活動・補植を続けている。

「バリの森を考える会」研修会—乾季—

乾季に開催の「勉強会」も、開催回数を可能な限り増やすことを試みている。ウブドの棚田がバリ島内で初めて世界遺産に登録されたのを受けて、バリ森会は、2012年度は棚田を保全する農家の人たちとその水田灌漑用水を管理する組合（subak）と共同で、タバナン県立スバック博物館と同県のジャティルイの棚田を視察した。加えて、バリ島中部の高原地帯のヒンズー寺院の敷地内に植えられた「河津

Nobutaka Mitsumori and Sachiko Takahi : Activity of “Bali Ethical Eco Planning” in Republic of Indonesia

*¹ バリの森を考える会代表、*² 秋田大学教育文化学部



写真 1 2010年12月キンタマーニ高原 水位の下がったバトゥール湖をバックに苗木を持って植樹に向かう高校生たちと「バリ森」の参加者



写真 2 2011年12月 GITAKITA の植林活動

桜”を見る会」や島内の在住日本人やバリのの人たちで作っている「クリーン・アップ・バリ (UCB)」の呼びかけに応じて、海岸のマングローブ林でゴミ拾いとマングローブ植林活動なども行った。またバリ森会は、アジア各地の里山・里海の調査・研究で知られる農学博士・養父志乃夫氏の講演会を主催した。

今後の目標

バリ島の面積は約 560,000 ha、うち森林面積は現在 127,000 ha で、森林被覆率 23% 程度しか存在しない。近年、この森林被覆率を 30% に回復させた

いと、官・民一体の運動が進み始めた。バリ州政府は、「2010年緑のバリ」というプロジェクトを立ち上げ、知事自らキンタマーニ高原へ植林に出向くなど、積極的な姿勢を見せている。これに対応して、島内にある他9県も、各森林保全の予算の増額・獲得を図るなど前向きな行政を見せ始めている。

観光産業が中心の島で、製造業などは皆無に近いが、ホテル・観光業関連の事業主も、それぞれ同業組合を通じて、植林事業に取り組む姿勢を見せている。またオーストラリア、オランダなど諸外国のバリ島在住者が作るボランティア団体も連携をしながら、自然環境の保全・育成・回復に貢献してきている。

この動向の中、「バリ森会」も、できるだけ多くの仲間の輪を広げていきたいと模索を続けている。とりわけ、バリ島の人たちが、従来から守り育ててきた、「生活の場と自然環境との共生」を進めてきた下で回復・維持をどのように支援するのか、検討している。バリ島内の大多数はバリ・ヒンズー教徒で、その基盤には「トゥリ・ヒタ・カルナ」という哲学がある。これは「神と自然・自然と人・人と神」が三位一体となって、暮らしを守り、維持するという理念である。スバック＝水利組合と棚田も、その哲学思想に基づき、数百年続いてきた。その人々が暮らす集落＝バンジャールの周囲には、果物や花々が実るこんもりとした森があり、水や餌となる生態系が豊かに生息し、自然循環型機能が形成されている。

それが、島の唯一の産業となる観光地としての経済発展により、若年層は都会へ流出し、農地や森林保全をするのは高齢者層になりつつあり、自然環境の保全・育成が困難な状況になってきている。どこかで見た風景が繰り返されているのも事実である。だが、もう一度、原初に立ち返って自然環境との共存の生活を見直すという空気も人々の間に生まれている。この考えが最近の「バリ森会」の仲間たちの間でも主題になっている。

個人グループのボランティア活動では、活動時間の制約、資金難、人手不足など課題は多くあるが、「バリ森会」の将来の目標は、バリの村人たちと一緒に、自然環境と共に生活をする豊かさを再考する機会を、植林活動を通して作ることである。

¹水源涵養林再生植林プロジェクト対象地域：バリ州バンリ県